

# ごはん

稲穂の草原を渡る風が  
彼女の髪を撫でる時、  
美しい「奇跡」が起こる。



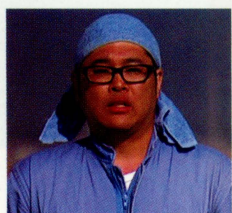
### 寺田ヒカリ ● 沙倉ゆうの

幼な顔に愛らしい笑顔。やや古風な佇まいは昭和の女優の雰囲気をかもしだす。劇場公開作「拳銃と目玉焼」(2014年)ではヒロインを演じ、同時に未来映画社の看板女優でもある。本作「ごはん」では主役に抜擢され4年に及ぶ撮影にも泣き言をこぼさず最後までヒカリを演じきった。撮影期間中に演技力もさることながらコンバイン、田植え機など大型農機の操縦技術が著しく向上、「日本一コンバインの似合う女優」との異名を持つ(?)ロケ中に農家から「是非うちの嫁に」と引き合い多数。



### ゲンちゃん ● 源 八

元お笑い芸人。某お笑いコンテストでベスト8まで残った実績を持つ。「拳銃と目玉焼」では振り込め詐欺のメンバー役と呼ばれたものの、あまりに善人ふうの顔立ちに監督より降板を頼まれる。「ごはん」では「2.3日で終わるから」と呼ばれて気軽に引き受けるが監督の構想が膨らみ長編となる過程で4年の撮影に巻き込まれる。福岡出身なのに熊本出身と勘違いした監督に「なぜ熊本弁がヘタなんだ!」と怒られ「僕、福岡なんです」と答えたが「何故今頃言う!」と再び怒られた。



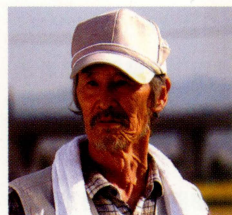
### お父さん ● 井上 肇

東京を拠点にドラマ、映画で幅広く活躍。生粋の江戸っ子。ドラマ「SPEC」の刑事役を見てファンになった監督が「拳銃と目玉焼」の小野孝弘に「あの俳優さんいいですね〜」と呟くと「僕の知り合いです」との事。四ツ谷の焼鳥屋で初めて会い意気投合。風貌が「ごはん」のモデルとなった監督の父と似ていることもあり出演が決定。面倒見良く人懐っこい好人物、別の作品の撮影で京都に来ると「ごはん食べに行こう」と監督に電話せずにはいられない寂しがり屋な一面も(笑)



### 西山老人 ● 福本清三

言わずと知れた「日本一の斬られ役」トム・クルーズ主演の「ラストサムライ」では重要な役を演じ脚光を浴びる。また「太秦ライムライト」では主役に抜擢され数々の受賞に輝いた。「拳銃と目玉焼」を知る東映撮影所の担当者が「安田監督の作品なら」と出演を快諾。物語のキーマンとなる老農夫を演じる。1分ほどの長回しのカットでは70回に上るリテイクを要求されるも嫌な顔ひとつ見せず最後まで演じきる。ハリウッドスターにも関わらず非常に謙虚で誠実な人柄、現場の皆が魅了された。



### 敏子おばちゃん ● 紅 杏子 (萬子)

関西を代表する女優のひとり。テレビ・映画多数出演。絶妙な間、リズムカルなセリフまわし、意表をつくアドリブ。関西のおばはんを演じさせれば圧巻のリアリティ。積極的にアイデアを出し作品を良くしようとしてくださる姿に感銘。ただし撮影が押している時にもセリフに納得がいけないと撮影を中断して監督に説明を求める。その姿勢に感謝しつつ困り顔を隠せない監督であった(笑) 損得抜きで作品にのめり込む職人気質。座長として浪花人情紙風船団を率い精力的に活動。



監督/脚本/撮影/照明/編集/安田淳一 出演/沙倉ゆうの 源 八 井上 肇 福本清三 紅 杏子 多賀勝一 福田善晴 戸田都康 浅野博之 鈴木ただし 小野孝弘 森田亜紀 賀美佳 高寺裕司 徳竹未夏 石垣のぼる 宮田康平 上西雄大 前田也須子 井垣泰介 頼里高次 南野芳嗣 夜明 新 香山崇志 古野二葉 川口美 大川由香 小村友希 葉 愛梨 嵐 千尋 伊月望美 庄司 苗 福士唯斗 福士彩斗 廣瀬翔也 中川星七 ポプマーサム 安田 豊 音声収録/坂井健一 岩見一樹 佐藤龍二 南野芳嗣 石岡良敦 税法リサーチ/赤野真依子 鈴木やちよ 小道具/白木俊也 ログハウ/藤岡高史 撮影アシスタント/今井伊織 前田智広 飯田勝士 中谷昌代 伊藤智博 岩見一樹 戸田有三 鈴木ただし 藤本尚久 安田一生 山本沙央梨 赤野真依子 大和真弓 藤岡高史 白木俊也 沖夏菜 市川祥次 大和聖史 青山理沙 佐々木優 田中那由 土路生美 後藤達哉 中島 尊 世良真子 橋上尚子 プレスリリース/木下実沙 中俣聖美 協力/二本俊彦 内田 聡 岩見龍二 安田 豊 大学コンソーシアム京都 東映京都撮影所

【新宿バルト9】1/21~1/27 1/19もしくは1/20に前夜祭を予定 【梅田ブルク7】1/23~1/27

【横浜ブルク13】1/23~1/27 【T・ジョイ京都】1/23~1/27 【T・ジョイ博多】1/23~1/27

各劇場にてキャスト・スタッフの舞台挨拶予定(舞台挨拶のない会場もあります)上映時間は劇場サイトでご確認ください。

映画「ごはん」に関する最新情報はFacebook未来映画社公式ページをご覧ください。



未来映画社



予告編がご覧になれます。



## ストーリー

東京でOLとして働くヒカリに父が急逝したとの知らせがはります。彼女の父は京都で米作り農業を営んでいました。幼い頃に母を亡くしたヒカリは仕事に明け暮れた父とはぎこちない間柄でした。葬儀のために京都に戻ったヒカリ。年老いた農家の人々に頼られ生前に父が引き受けていた田んぼが30軒分(15000坪)もあると知り愕然とします。田植えが済んで一ヶ月がすぎ、稲はどんどん成長しています。

「誰かが田んぼを見なければいけません」

足を怪我して入院中の青年源八の頼みと、田を預かっている西山老人の

「お父さんがあんなに頑張ってた理由を知りとうはないか」との問いに、ヒカリは父の残した田んぼを引き継ぐ事にします。

米作りの経験も知識もない彼女でしたが、さまざまな人に助けられ、昔から伝わる先人の知恵を借りてひとり奮闘。

決して牧歌的ではない現代の米作り。それは広大な田んぼと、一人の女性との命がけの戦いでした。

そんな中、仕事一筋に生きた不器用な父の思いをヒカリは少しずつ理解し始めます。

やがて秋の風が稲穂の草原を渡る頃、想像もしなかった美しい奇跡が起こるのでした…。

## プロダクションノート

就労者の平均年齢は65歳を超え、高齢化を高コストと引き換えに農作業の機械化で補っているのが日本の米作りの現状です。

この作品はそんな農家の現状を背景に、コメ作り農家を継ぐ事になった若い女性の奮闘を描きます。

そこには大量の水田を管理しコメを作る、過酷な労働としての農業があります。

日本映画で描かれてこなかった米のリアルな生産過程と、日本映画史上もっとも美しく田園風景とその自然を映し出します。

撮影に要した時間は実に4年。

キャスト、スタッフの予定に加え、稲の成長、天候、実際の農作業の進捗状況などの複雑なスケジュール調整に手間取りました。

また、いわゆる「美しい映像」だけでなく、娯楽として楽しめる作品を目指しました。

## 優れたフィクションだけが持つ魔法の瞬間

農家の長男であり、映画にも携わっている身で書かせてもらおうと米づくりは映画に似ている。

とにかく手間も金もかかるし、予想もしないトラブルばかり起こる。積み重ねた努力は台風一つで水の泡になる。

そして、何よりも報われることがほとんどない。

しかし、『ごほん』が描き出すのは、そんな損得勘定から外れた人間の営みの美しさだ。沙倉ゆうの演じるヒロインは、

若くして米づくり農家の仕事を引き継ぐことになる。彼女は夏の厳しい日差しの中でも田んぼに水を引いて回り、

収穫の秋には稲刈りに精を出す。そこに見返りはない。しかし、その純真が周囲の人々を巻き込んでいく。

黄金色の稲穂の海で動き続ける彼女のシルエットは、まるで王蟲の群れを渡る王女のようなのだ。

そう、沙倉ゆうのは農業地帯に舞い降りた、ゴム長靴姿のナウシカなのである。

そして、ヒロインは農業、いや、全てのものづくりに携わる人間のプライドを代弁してもいる。

現代人が気にも留めていない風景にこそドラマがあるのだと『ごほん』は訴えかけてくる。

なんの変哲もないことは、なんの価値もないことと同義ではない。

本作のもう一人の主演は他ならぬ田んぼそのものである。

苗から稲穂への成長はもちろん、雑草や小さな虫にいたるまで慈しみに満ちた視点が映像に宿っている。

それらが画面に映し出されるたび、誰の目にも映らなかった全ての精霊たちに名前が与えられるような崇高さが胸に迫ってくる。

優れたフィクションだけが持つ魔法の瞬間がきっとあなたを待つだろう。

そして、思い出す。我々はその名前を知っていたはずだ、と。

『ごほん』はあなたの日常を一変させる作品である。

本作を見終わった後、あなたが家で口にする米粒の一つ一つはどんな味がするだろうか。

魔法の余韻はあなたの食卓にまでつながっていく。

文=石塚就一(映画ライター・京都在住)

